フィールド（現場）からの風 ㉙

宮田守男

危機的な状況に対応する姿を学ぶ事で
地域の未来について考えてみませんか

信州大学学園祭・銀嶺祭でにぎわう信州大学松本キャンパス経法学部講義室で10月下旬開催された、信州大学大学院・地域社会イニシアティブ・コース主催のシンポジウム「東北に学ぶ地域社会の未来」に参加する。信州大学の学生サークル「SKIP」が東北支援事業を展開する視点から企画された。

「東北の今～復興から新興へ、支援から共創へ～」をテーマに新興事業創出機構の鷹野秀征さんは、東北での産業支援現場の実情を報告。震災により人口流出と産業衰退が加速している。インフラ復旧は、おおむね終了。営農再開可能面積は74%、水産加工施設は87%復旧済みだが、震災前の状況まで復興する事は困難と指摘。

宮城県女川町の事例、「60歳以上は口出すな。50歳代は、口は出すが手は出すな。主流は30歳～40歳」の方針には、違和感を持ってしまうが、新興の現場の困難さも伝わってくる。従前の依存体質と長老の弊害が最大の課題、地域づくりに若者の参加が必要との報告に、若者だけでなく、地域の培ってきた高齢者の知恵との融合を図るための施策の展開ができないかと感じてしまう。

農業生産法人株式会社GRAのミガキイチゴ・ラボリーダーの勝部達也さんは「山元町から世界へ～イチゴの甘酸っぱい挑戦」をテーマに取り組みを紹介。ボランティア活動から被災地に就職した25歳の若手だ。山元町は震災の津波で、人口の4%が亡くなり、産業の中心だったイチゴハウス95%がのみ込まれた地域だ。「ボランティア活動より、経済や雇用をどにかく何とか」との切実な声が現地就職の原点と話す。

従前のイチゴ栽培を検討するが、朝3時から作業、10年の経験で初めて他の地区に勝る匠（たくみ）の技が身に付くとの話に、IT技術の必要性に着目。匠の技の記録をしっかり取ることから始め、センサーで測る事に。商品デザインとブランド化での展開で、イチゴ一粒、1200円の価格が販売現場から提案されているとの報告と、インドへの展開が成功し、他の事業者の目標となる事を期待したい。

河北新報社の古関良行編集局は「今、被災地から～移住者たちの人模様～」で4万部発行する新聞で、チャレンジする人をターゲットに地域に紹介する活動を紹介。東北を何とかしたい人の気概を伝える大切さを伝えてくれた。

（NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上）

親睦会でミガキイチゴ100%のスパークリングを熱く語る姿に新興への本気度が伝わってくる